

パリ通信111号案内

今月号フランスでは3月17日全土で都市封鎖が始まった。ワクチンの進行状況が記されています。ルイズ・カトリヌ号の修復状況と姉妹船「ジュ・セール号」の新しい情報が記されています。ル・コルビュジェ、前川国男、丹下健三、遠藤秀平ら蒼々たる建築家が繋がって行く建築設計に携わる方には歴史的な日仏の民間文化交流の連載物語です

受験準備

認知症の予防になるか

少し大袈裟なテーマになっていますが3月27日から2日間の試験に備えて勉強しております。80歳を前に野望も野心もありません。ただ自分の頭の訓練のために、どれだけ世間について行けるか楽しみにしております。

試験は日本交流分析協会のTA2級卒業試験で、合格すると1級に進めます。

COVID-19下、昨年10月から東京田町に通い途中1回はZOOMとなりましたが、6ヶ月間、若い人たちと机を並べることができました。

受験についての体験を思い起こして驚くことは、私の大学合格も税理士試験合格も「マグレ」の一言で「運が良かった」と言えます。それには過去問が入手でき傾向と対策を準備できた、そして、それがたまたま当たったということです。

今回はそれがなく、学問の原則に従って定義を暗記して理解をしていくことになりました。①内容は理解できても定義が正しく記せない。②時間があれば説明はできるが試験には制限時間がある。今この2点に大きな課題を発見して、人生の意味を新たに知らしめられたところです。

定義を正しく記すとは暗記することです。この現実と直面しながら色々なことが頭をよぎります。

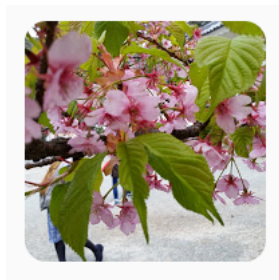
森 信三先生の言葉に励まされて

「教育とは流水に文字を書くような果てない業である。

だがそれを巖壁に刻むような真剣さで取り組まねばならぬ」

(森 信三著「不尽精典」P162)という名言があります。

背筋を伸ばしてこの言葉の意味を噛みしめながら、轟音を伴う滝の上に文字を書いて覚え流され、又書いて覚え、流され、覚える前に流されているような心境ですが、これが楽し



いのです。覚えようという意思をもって30回位書いていくと30%位は歩留まるように感じ出しました。すると後30回書けば歩留まりが60%を越えるかもしれないという希望が持てるのです。残る10日体調を整えながら合格点（60点）を目指して楽しみながら机にむかっています。昔は録音して電車の中などで覚えました。今回も試して見ましたが、体力がついていかないというか、自分の声に集中することが出来ず、私にはこの方法は向かないと思い、ひたすら書くことにしました。

「果てない業」か「儚い業」か

話は変わりますが、先に引用しました森 信三先生は有名な方ですから名言集もあり、その筋の方がたくさんWebで紹介されています。ところが読み手に決定権があると言ってしまえばそれまでですが、読み手の教養に制限されて間違った解釈が横行していることが残念でなりません。

具体的に申しますと「果てない業」を「儚い業」と書いて紹介されています。今のところそれを訂正する記事は見つかりませんから、後世には「儚い業」が伝わっていくでしょう。こうして原作者の言葉の持つ清浄さが汚されていくのです。大袈裟に申せば歴史書はこのような誤謬の連続だといえることが多いようです。今ひとつは伝承者が忠実に伝えることをしなければならないと思います。

Webを甘く見ることはもう出来なくなっています。森 信三先生のお弟子さん、関係者の方にこの情報が伝わることを願うばかりです。

ベートーヴェンの第九の合唱の歌詞の中に

Seid umshlungen（抱かれてあれ）が受動態であるのに、普遍的な訳では「抱き合え」となっていることに違和感をもって、シラーの詩のみならず、その背景にあるルターの宗教思想、ドイツの精神史、「ルターとエラスムス論争」と研究を重ねて半生涯を捧げておられる方がおられ、私はその方と親交を得て、この方からの示唆によって、私も動かされ「アウグスティヌス告白・神の国」遡りさらにはソクラテス・プラトン・アリストテレスに至り、ついには「世界哲学史・全10巻」（ちくま新書）を購入するに至りました。



この第九のSeid umshlungen（抱かれてあれ）は真剣にベートーヴェンを聴く人には意味のある研究だと考えますが、大多数の解釈が定着してしまっているために、音楽そのものが「あらぬ方向に」利用されるということがしばしば起きています。私の第九の邦訳はベストピア2020年12月号に大胆に記しました。合唱の全訳をすると普遍的に通用しているものに違和感を覚えるのは私たちだけではないと考えています。

このようなことは「儚い」ことなのか「果てない」ことなのか、面白い論議です。

コロナ禍で安心して歩ける近隣のお花畑や公園を毎日歩いております。移りゆく花々の成長と変化を観察しながら、歩ける幸せを大地に伝え感謝の日々です。